

序論

住文化論をめざして

序論 住文化論をめざして

13

はじめに 14

一 御仮屋の残る住まいの原型 14

二 「クチーオク」の秩序 16

三 座敷・縁・雨垂れ落ち・庭にみられる緩衝空間と「結界」 19

四 都市の住まいにみる変容と住居観の動向 22

本書の概要 26

第一章 祭祀施設にみる住まいの原点

第二節 古代の御仮屋が残る春日若宮祭

30

はじめに 30

一 御仮屋の形態および材料 31

二 御仮屋の造作に費やされたエネルギー 34

三 大宿所の儀礼と仮屋 35

四 御旅所と大宿所からみた祭祀形態 38

五 若宮祭と頭屋儀礼の共通点 39

第二節 諏訪大社上社の儀礼と御仮屋

42

はじめに 42

一 神事組織と基礎資料 42

二 御頭祭と御仮屋 43

三 精進屋の原型としての御室 47

四 御射山祭と御仮屋 50

五 御仮屋からみた司祭者と祭祀形態 55

第三節 頭屋儀礼における御仮屋の諸相

58

はじめに 58

一 春日若宮祭の影響を受けた御仮屋 58

二 閉鎖的な構造 61

三 床の有無からみた御仮屋の形態 63

四 仮設性 70

五 鎮守の森の延長 71

第四節 御飯屋に残る住まいの原感覚

73

はじめに 73

一 御飯屋にみる閉鎖的な構造と土座 73

二 寝室としての機能 75

三 塗籠から納戸へ 78

四 疊的再生の場としての「室」 78

五 住まいの構造と寝室 81

第二章 住まいの秩序が反映した屋内神の祭場

第二節 「クチーオク」の方位がつくりだす秩序

84

はじめに 84

一 「オモテウラ」と「カミシモ」 85

二 人生の節目に移動する寝室 86

三 住まいの最奥部ナンドがつくる「クチーオク」の秩序 89

四 集落にも存在する「クチーオク」の秩序 90

五 「クチーオク」の秩序を分析の視点に 91

第二節 住まいの「オク」に祀られる家の神

93

はじめに 93

一 井川地区の「居小屋」と荒神祭祀の空間的把握 93

二 祭祀の場の変容 97

三 木曾地方の荒神祭祀 98

四 屋内神としての荒神祭祀誕生の背景 101

五 住まいの「オク」に祀られる家の神 103

第三節 あいまいな秩序の部屋——「カミ」と「シモ」の間

106

はじめに 106

一 次の間に祀る庚申 106

二 次の間に祀られた金比羅神 109

三 次の間に付随する柔軟さ 112

四 住居空間の秩序からみた次の間の機能 113

五 人と神との関係によって決定される祭祀の場所 114

第四節 ヲモテとウラ

116

はじめに 116

一 間取りと祭祀設備 116

二 祭祀設備の設置場所を決定する「オモテウラ」の秩序 120

三 対馬のダイドコ口とザシキ 121

四 家の神の性格をもつ仏壇の祖先 123

五 地域差の抽出に向けて 124

第三章 来訪神への対応

第一節 他界から聖地、そして住まいを訪れる神

128

はじめに 128

一 神の来訪を記憶する「装置」 129

二 神の来訪を認識する「装置」とよみまし 132

三 具現化された来訪神——宮城県加美町柳沢の「焼け八幡」 136

四 神と人が出会う場 139

第二節 ニワから座敷へ——奈良県平群町の頭屋儀礼を中心に

141

はじめに 141

一 住まいで展開される儀礼とその場 142

二 頭屋儀礼の場 143

三 葬送儀礼の場 148

四 庭で展開される年中行事や通過儀礼 151

五 住まいにおける庭と座敷 155

第三節 縁と床の間——南西諸島の床の神

160

はじめに 160

一 与論島および南西諸島の床の神祭祀 160

二 縁を祭祀の場とする沖永良部島の播種祭 162

三 床の間と縁の同質性 164

四 中柱と床の間 166

五 「床の神」の創出 167

第四節 結界——持仏堂から仏壇へ

169

はじめに 169

一 住まいの概要——菊池義郎家を例に 170

二 近年まで残存してきた持仏堂 173

三 仏壇の導入 177

四 持仏堂と仏壇からみた八丈島の祖先祭祀 180

第四章 住まいの姿容

第一節 都市の住まい

184

はじめに 184

一 近代の都市住居史 185

二 事例の検討 185

三 都市住居の分析 190

四 間取りからみた暮らし 192

五 今後の研究課題 193

第二節 観光化のなかで暮らしを守る住まいを求めて

195

はじめに 195

- 一 奈良町の歴史といま 196
- 二 伝統的商家に暮らしを守る住まいを求めて 198
- 三 観光客に多様なサービスを提供する施設 200
- 四 行政の対応 201
- 五 住民主体のまちづくり 203

第三節 沖縄の住まいと暮らし——変容の視点から

205

はじめに 205

- 一 当山氏の住まいの概要 207
- 二 変容したもの 210
- 三 変容しないもの 212
- 四 神々とともに生きる暮らし 216

第四節 住まいの変容と伝統儀礼——沖縄県小浜島のヒンブン

218

はじめに 218

- 一 小浜島における残存状況 218
- 二 沖縄本島における残存状況と材料の変容 221
- 三 ヒンブンの機能と残存した背景 224
- 四 住まいとそれをとりまく空間の秩序 227
- 五 ヒンブンが創出する景観 230

第五章 田園都市「千里山住宅地」から学ぶ今後の住まい

第二節 田園都市とは

234

はじめに 234

- 一 ハワードが提唱した田園都市 234
- 二 日本での展開 237
- 三 田園調布 244
- 四 西洋風の街をめざして 247

第二節 千里山住宅地の誕生

250

はじめに 250

一 関西における郊外住宅地の開発 251

二 開発の経過を伝える図面 254

三 開発の概要 258

四 開発当時の景観 260

五 暮らし 262

六 住まい 264

第三節 住まいと暮らしの「変容」

271

はじめに 271

一 家族の動向と改築 271

二 近隣農村 280

三 中心と周縁に位置する部屋 283

四 伝統的生活の残存と変容 284

第四節 田園都市の夢と現実、その意義

287

はじめに 287

一 景観の変容 287

二 神社の勧請、寺院の設置 290

三 田園都市としての発展を阻害したもの 292

四 学園都市への模索 294

五 文化遺産としての「田園都市」 296

初出一覧 299

あとがき 302

索引 i (307)

はじめに

近年、住まいをテーマにしたテレビ番組が人気で、アイデアを凝らした奇抜な住まいが数々紹介されている。設計者に任せるのではなく、より快適な暮らしを求めて自ら住まいづくりに取り組む人が増加してきたことが背景にある。ここには、「住まいはあくまでも私的な所有物である」という意識がみられる。

しかし歴史的には、地域社会との関わりのなかで場所や規模、構造などが決定され、建築されてきた。概念としての「家」が社会の最小単位だとすると、「家」の容器である住まいもまた、社会的産物なのだといえる。現代は、個人レベルの生活が尊重されるがゆえに、地域社会や家庭における共同体的意識が希薄化したといわれる。それが犯罪など社会問題を生む要因だという指摘もある。住まいが社会的産物であるとする、その構造から社会の状況を読みとることも可能であろう。

住まいをテーマにした本は、これまでも数多く出版されてきた。しかし、その内容はほとんどが建築学分野に属するといっても過言ではなく、ハードとしての住まいが中心である。しかし、住まいは「住む」という基

本的な行為の所産であり、人文科学の分野からも研究すべき点が多い。本書は、住まいの構造と変容を考察することで住まいの意味を考え、さらに社会のありようを考える視点を提示する。すなわち、ソフトの面から住文化を論じようとするものである。そのためのキーワードを、「御飯屋」「クチーオク」の秩序」「緩衝空間と結界」「変容」としたい。

一 御飯屋の残る住まいの原型

奈良盆地をはじめ各地に、神霊を個人の住まいに招いて饗応する頭屋くちや儀礼が残存している。この儀礼のなかで祭祀施設としてつくられる「御飯屋」は、いずれも閉鎖的な構造をもち、身近にある材料を使用した仮設の建物である。

たとえば、奈良市の春日若宮社の祭礼では、御旅所みづりに御飯屋がつくられる。これは、黒木の松を柱とし、屋根は松葉で葺かれる。残された史料から判断して、このような形態と材料は若宮祭わかみやさいが創始された平安時代末期からほとんど変更されることがなかったと考えられ、古代の御飯屋を現在でも実際にみることで、

貴重な資料といわなければならない。

ところが、仮設を前提にした材料を使用しながら本格的な土壁が用いられている点は、本来の御仮屋の条件とは矛盾する。そして、三方を土壁で囲まれた空間は、古代の寝殿造りにみられた塗籠と同じ構造である。つまり、御仮屋は閉鎖的な構造で寝室の機能をもっていることになる。

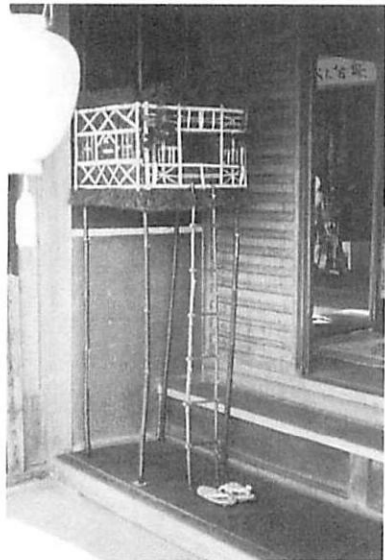
奈良市大安寺の頭屋儀礼では、御仮屋内の小祠に長さ約二〇センチ、直径約五センチの薦でつくった枕が納められる。枕の起源は不明であるが、鎌倉時代の『八幡宇佐宮御託宣集』に、薦の枕を毎年神霊に献上したとする記述がある。一般的に、枕は霊的存在の容器と解釈されているが、大安寺の事例の場合、御仮屋が寝室としての機能をもっていることを示しているとみていいのではなからうか。

盆に祖先の霊を迎えて祀る盆棚も、御仮屋の一種といえる。盆棚にも多様な形態がみられるが、西日本では屋形の外観をとり、やはり三方を壁とするものが多い。

三重県美杉村（現・津市美杉町）では、玄関の一角に檜葉を材料とした盆棚を設置する。注目したいのは、祖先の霊が滞在している間、棚にかけた梯子のもとに一足

の藁草履が置かれることである。祖先の霊は、藁草履を脱いだ後、梯子を上って盆棚の屋根の部分に落ち着くと考えられていることがわかる。ここにも「履物を脱いでくつろぐ」という人の生活が投影されており、盆棚が祖先の霊にとって住居であることを表している。また、高い脚は設置場所が屋外であることを前提にしていると思われ、屋内に設置される事例では、脚をもたない小祠の形態となる。梯子は、神霊を祀る場所が高い位置にあることを象徴的に示している。

なお、御仮屋や盆棚の材料は当地で入手が容易なもので、青竹や檜葉、杉葉などが使われる。これらの材料が



盆棚と藁草履
（三重県美杉村、現・津市美杉町）

新鮮な緑色を保っている期間はそう長くはない。このことから考えると、御飯屋が使用される期間も短かつたはずである。ここには、「来訪した神霊は、短期間の滞在の後に去っていく存在である」とする観念をうかがうことができる。

さて、大嘗祭だいじょうさいのときにつくられる悠紀殿ゆきのみと主基殿すゝめのみも、御飯屋のひとつである。とくに正殿は、黒木の柱に草壁、古くは草束を敷いた土座とざであり、閉鎖的な構造をもっている。内部は入り口側の「堂」と奥の「室むろ」に分かれ、室には寝台が設置されていた。寝台の上には枕も置かれ、室はまさに寝室であり、同時に神と天皇が交流をする場である。中岡義介は、室を主室、堂を前室とみなして、これは原始時代の住まいに共通する構造であり、近世に入っても民家に受け継がれてきたと指摘している。⁽¹⁾この指摘は重要で、次節で展開する住まいの秩序とも関連する。

また、「室」と共通する寝室の機能は、諏訪大社で中世まで行われていた御室神事みむろのかみこととおして理解することができる。冬季の二か月間、少年の大祝おほほろひが蛇体のつくりものと籠る御室は、人と神とが交流し、人が神から霊力を獲得する場であった。⁽²⁾このような機能をもつ御飯屋は、

出雲大社の国造くにぞうの襲職いせし儀式でもつくられ、かつては一般的なものであったと考えられる。⁽³⁾

このように、御飯屋は来訪した神のための臨時の住まいといえるが、その基本的な機能を「寝室」とみなすことができる。これは、住まいの原型ともいえる。

二 「クチーオク」の秩序

アフリカのケニア北部には、ラクダやヤギ、ヒツジを飼育しながらキャンプと集落を拠点に放牧生活をおくる、遊牧民「レンディール」が住んでいる。

佐藤俊つとむによると、集落の中央部には礼拝場と家畜を収容する囲いがあり、その周囲に三〇〇四〇の小屋が配される。さらに、環状に並んだ小屋の外側に、集落をとり囲む垣根が設置される。集落を管理するのは男性であるが、住まいである小屋を建てるのは女性である。

小屋は、しなやかな木を骨組みとし、その上に長さ一メートル、幅一・五メートルの藁をかぶせる。外観は、直径約三メートル、高さ約二メートルのドーム状である。内部は、入り口を入ると手前が土間、奥が牛の皮を敷いた居間になっている。土間には、左手に調理施設の炉が

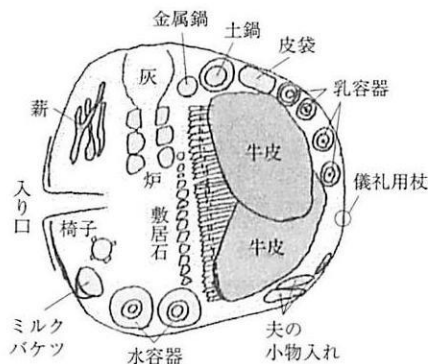


図1 レンディーレの住まい (佐藤俊「レンディーレのテント」『季刊リトルワールド』63号を元に作成)

設けられており、右手に椅子や水を入れる容器が置かれている。居間には、左手に鍋やラクダの乳を入れる容器が、右手に夫の小物入れが置かれている。そして、奥の壁に相当する部分には、儀礼用の杖と乳容器類が吊るされている。

一見すると単純な一つの空間に思われるが、図1をみるとわかるように、敷物や炉や家財の配置によって四つの空間に分割されている。すなわち、敷居となる小石の列によって土間と居間とに二分され、さらに、夫と妻の

持ちものによって男の場と女の場に分割されているのである。

佐藤によると、この小屋に客が訪れた場合、小屋の中に入る事ができるかどうか、入れた場合は土間までか居間まで入りこんでいいのか、さらに居間で寝ることが許されるのかどうかというように、人間関係によって客の扱いに差が生じるといふ。

入り口が続いて土間があり、小石の列を結界にしてその奥に居間がある構造に注目したい。佐藤は「居間」と表現しているが、この場所の主たる機能は、寝室であろう。ここには、出入り口の「ククチ」に対して、寝室のある「オク」の秩序を読みとることができる。

さらに、寝室の壁に儀礼用の杖が収納されている点も興味深い。寝室が、貴重品の収納の場であると同時に儀礼の場であることを示している。日本でも、住まいがこのような一つの空間であった段階では、同様の觀念が存在していたと考えるべきであろう。

これまで、日本の住まいについては「オモテウラ」と「カミシモ」の秩序に着目して論じられてきた。「オモテ」が主として接客のために使用されるのに対して、「ウラ」は家族の日常生活の場となる。また、出入り口

から遠いところほど上席とする秩序は、「カミーシモ」の秩序で説明される。

四間取りの住まいは、この二つの秩序で理解することができる。しかし、広間型の住まいをはじめ、全国に分布する多様な間取りの住まいと、そこでの暮らしを分析してみると、「クチーオーク」の秩序が空間認識の基本になっているのではなからうかと思われる。前出の大嘗祭の本殿のほか、本論でもとりあげた古代の神社建築にこの秩序を読みとることができ、それは「オモテーウラ」と「カミーシモ」の秩序に先行して存在していたものと思われる。

これは、近代の都市の住まいにもみることができ。私は「クチーオーク」の秩序が日本の住まいの基本と考え、これを本書の主たる視点とした。

さて、オクにあたる位置に設けられるのが、寝室である。高取正男は、住まいが、単室の空間から内部に間仕切りが発達するとともに屋外に向けて開口部が増えてくると、最奥部に壁で囲まれた寝室がつくられるようになったと主張した。^⑧

ただし、オクは必ずしも、空間的な奥^⑨を指すとは限らない。宮本常一は、香川県や徳島県、鹿児島県など

で寝室のことを「オク」と呼ぶことについて、その部屋がとくに奥にあったわけではなく、他人にみせることのない部屋であるからだと主張している。^⑩観念的な奥^⑪と意識する空間ということであろう。私は、空間的な奥^⑫に加えて、観念的な奥^⑬に相当する空間も、オクとして把握し、この、オクが住まいの空間のなかで重要な秩序を創出していると考えている。

本論で詳述するように、寝室やその奥にある部屋が神祀りの場になつていゝ事例が、全国的に分布する。そこで祀られるのは、納戸神や荒神、座敷童子などである。これらの神々は、「家」を守護する「家の神」である。また、これらの民俗的な家の神が中世の守宮神の系譜を引くとする、高取の指摘がある。^⑭古代の天台系の寺院に建てられた常行三昧堂の後戸に祀られていた摩多羅神など、後戸の神については、服部幸雄の研究がある。^⑮これについても、高取は鋭い指摘をしている。強力な靈威をもつ後戸の神であるが、後戸という場所が先にあり、そこにふさわしい神として摩多羅神が祀られたのだという。そして、この堂は靈驗を期待した人々が参籠し、忌み籠る聖域であつたとする。高取は聖的な場に着目したのであり、そこはまさに、オクの空間であつた。

三 座敷・縁・雨垂れ落ち・庭にみられる

緩衝空間と「結界」

徳島県東祖谷山村(現・三好市)は、平家の落人伝承が伝わる秘境として知られている。山の斜面を削りとつて敷地が造成されるため、奥行の少ない土地に並列形式の

間取りをもつ住まいが建てられる。図2は、東祖谷山村中上の西岡久光家の平面図である。前面には幅四メートル程度の前庭がとられるが、背面はほとんど板壁で閉鎖されている。軒は深く、独立柱で支えている。当地では前庭をヒノルワ、雨垂れ落ちをアマダレボッチ、軒下の空間をオオブタノシタと呼んでいる。



西岡久光家 (徳島県東祖谷山村)

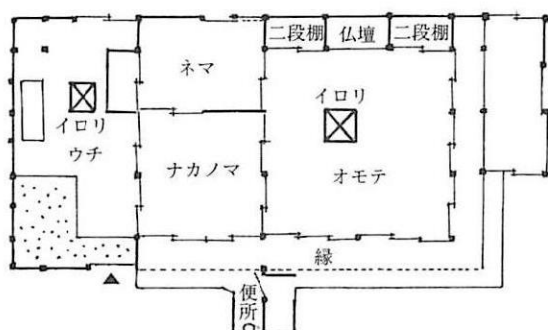


図2 西岡久光家(『東祖谷山村誌』所収の図より作成)

当地で採集した、葬送儀礼の聞き書きの一部を紹介しよう。葬儀の当日、雨垂れ落ちに柎(ひいらぎ)やカラタナ、アザミなどを置く。オモテに安置していた棺は内縁、外縁を通って直接前庭に出す。また、前庭では死者が生前使用していた茶碗を割る。前庭で、左回りに三回棺を回した後、野辺送りの行列を組んで墓地に向かう。出棺の直後に、家に残った者が、棺が安置されていた場所を箒で掃き出す所作をする。

死後六日目の夜に死者の霊が家に帰ってくると考えられている。このため、前庭に「お六日棚」と呼ばれる仮屋をつくる。これは、葉のついた一・五メ

トルの笹竹四本を脚にして、なかほどに棚をとりつけたもので、棚上に白木の位牌と落の葉を置く。また、前右の脚に養と笠をかける。当日、親戚や近所の人が参つて落の葉の上に米や水を供え、最後に参列者が揃つて念仏を唱える。

満中陰に、位牌をもつた主人が前庭から縁を通つて直接オモチに入り、仏壇に安置する。仮屋はこの日、畑の隅で焼却する。

一二月の辰巳の日には、墓参りをする。墓地から帰つて、箕に灰を入れて外縁に置いておくと、犬や猫、鳥などの足跡がつくという。これは死者の霊が帰つてきたもので、その足跡から死後の生まれ変わりを知ることができると考えられている。

ここで注目したいのは、オモチと縁、前庭の連続した空間で儀礼が展開するなか、雨垂れ落ちが重要な役割を果たしているという点である。

葬儀の当日、雨垂れ落ちに柙やアザミなどどげのある植物を置くのは、死者の霊を住まいの中に入れたいためである。六日目の夜に霊が家に帰つてきても、前庭で供養を受け、それ以上の侵入は許されない。満中陰を迎えてようやく、住まいの中に迎え入れられる。主人が位牌

を持つて入る行為も、「死者の霊は、自身では雨垂れ落ちを越えることができないから」と説明されている。一二月の辰巳の日に死者の「生まれ変わり」を確認するため、箕が置かれる場所が縁なのは、「死者の霊は、この時点になつて、雨垂れ落ちを越えて縁までは入ることができると考えられているのであろう。」

雨垂れ落ちは、三途の川に相当するともいう。ここには、雨垂れ落ちをめぐつて人と死者の霊が対峙する構造をみることができよう。

また当地では、目イボができると雨垂れ落ちの小石を拾つて目イボにあてた後、便所の屋根に放り上げ、治癒後に元の雨垂れ落ちに戻す習俗もある。これは、「外」の世界の小石に目イボをつけて再度「外」の世界に送り出すという意味をもつた、類感呪術である。

これらの習俗は、雨垂れ落ちが住居の「内」と「外」との「結果」であることを示している。建築構造上は、外縁と内縁との間の建具が結果ということになるが、観念上は、雨垂れ落ちが結果である。雨にあたる場所は外であり、小石を放り上げた屋根もまた、同一線上の結果と意識されている。降水量の多い当地では、それが実感されることであらう。

鎌倉時代末期に制作された「春日権現験記絵」の第八巻に、板葺平入りの京の町屋が描かれている。住まいの中で嘔吐する家人を屋根の軒から眺める疫鬼とともに、路上に赤い紙と黒髪をつけた御幣、供物などがみられる。これは、鬼のいる屋根に対応して設けられた魔除けの装置で、その場所は「門先」と解説されている。しかし私は、これらの装置は門先というより雨垂れ落ちに描かれたものだとみる。この図は当時の京の町屋における境界の觀念を明確に示しており、東祖谷山村の住まいでみられた結果と同じ構造を認めることができる。

住居空間の内部と外部、とくに屋内と屋外の境界が明確に意識される場所は、玄関であろう。そのため玄関には、多様な魔除けの装置がみられる。たとえば、粽やニンニク、米寿を迎えた人の手形である。節分に、焼いた鯛の頭を柵の小枝にとりつけて、玄関脇の柱の隙間に挿しこむところも多い。また、「乞食」への施しが玄関の敷居をはさんで行われたように、敷居は屋内と屋外の境界を示す象徴であり、境界の機能をもつものであった。和歌山県伊都郡かつらぎ町では、盆に祖先の霊を迎える際、仏壇の前に盆棚をつくる。しかし、新仏については別に、縁に「アラタナ」を設置して供物を置くという。

これは、新仏がまだこの世に未練を残しており、家人に祟る危険性をもっているからであると説明される。さらに、祖先の霊についてきた餓鬼仏については、庭の隅に供物を置く。

この事例では、縁を屋内と屋外の中間にあるあいまいな空間として位置づけ、新仏のような、あいまいな性格をもつ神霊に対応する場所として使用しているのである。奄美諸島（鹿児島県）の請島や与論島でも、異常死をとげた祖先の霊を「コスガナシ」と呼び、玄関に藁人形を置いて接待させている。この地域の玄関は、昭和になつて縁の一部が出入り口として発展したものであり、本来は縁で行われていた習俗だと思われる。

なお、軒下に盆棚を設置するところもある。軒下も縁と同質の空間であり、縁が一般に普及する以前は、軒下が屋内と屋外の境界空間として利用された。

一方、前庭も境界的空間といえる。農作業の場であるとともに、神を迎えて祀る場でもあった。

正月の門松や卯月八日の天道花など、年中行事のなかで神霊を迎える「依代」が立てられる場所が、前庭である。また、前出の御飯屋や盆棚の設置場所についても前庭に設置する事例が古態を伝承していると思われ、軒下

や縁、さらには屋内へと変遷する方向性が認められる。

これは、室内に「ザシキ」と呼ばれる客間が成立していく歴史と関連する。ザシキは、屋内にあって日常生活の秩序とは異なる部屋であり、この部屋の成立によって、来訪してくる神を客として迎え入れることが可能になったと思われる。

以上のように、日本の住まいは、玄関の敷居や雨垂れ落ちといった結界の機能をもつ装置とともに、縁や前庭というあいまいな境界的空間をもっている。来訪する神を迎えた際に両者の機能が顕在化し、神々の性質に応じて柔軟な対応をしてきたといえよう。

四 都市の住まいにみる変容と住居観の動向

生活の変容にともない、住まいの構造なども変容する。その「変容」の視点から、逆に変容しない住まいの基本的な構造も浮き彫りにすることができる。

住まいの原点は、動物の巣に求めることができる¹⁸。巢に共通する機能は、外敵から身を守ることと、出産や育児の場になることである。

しかし、巢と住まいとの間には、大きな差がある。巢

にはその構成員以外が入ることはないが、人は、社会生活を営むなかで、住まいの中に家族以外の客を迎えてきたのである。つまり、住まいは、基本的には閉鎖的な構造をもちながらも、外に向かつて物理的・精神的に開かれた空間だということができる。

遊牧民の使う単純な構造の住まいをはじめ、日本各地の住まいにおいてもみられる接客の作法には、「親しい客ほど奥まで招き入れる」という共通点が認められる。私たちが客を迎えたときにかける「さあ、奥へどうぞ」という言葉には、その客が心を許した親しい人である旨を伝えるという意味があるのである。

一九六〇年代の高度経済成長は都市部の人口を激増させ、現在では日本の全人口の約八割が都市に住むといわれる。この動きにあわせるように、住まいから「縁」が姿を消すようになった。あいまいな空間である縁は、非日常的な出入口であるとともに、非公式な交流の場でもあった。近所の人が気楽に立ち寄って談笑できる設備である。同じころ、住まいの内部には子ども部屋がつけられるようになった。高校への進学率が急速に高くなつたなかで、「子どもが勉強に集中できるように」という配慮が生み出したものである。しかし一方で、子ども部

屋の新設は、親子や兄弟・姉妹間の関係を疎遠にしたといわれている。

建築技術の発達によつて、窓などの開口部を増やし、私たちは外観上は開放的な構造の住まいをつくりだして、快適な生活を実現してきた。しかし、住まい方に注目してみると、他人や多数の客を迎え入れることを拒絶する傾向をもつ現代の住まいが浮かびあがる。すなわち、精神的に閉鎖的な構造をもつ住まいである。

現代の住まいが再び閉鎖的な構造をとる傾向にあることは、巢への回帰であり、この背景にあるのは、都市部に増加した犯罪などがもたらす社会不安であろう。さらに、家族の各々が個室をもつようになり、現代の住まいは外部に対してだけではなく内部でも互いに閉鎖的な構造をもっているといえる。

ここには、地域社会よりも家族の生活、さらに個人の生活を重視する価値観が主流となったことを指摘することができよう。それは同時に、地域社会の共同体意識、そして家庭における家族の一体感の喪失と密接に関連している。このような変化は、住まいの屋内外に境界の明確化を求める。その結果が、縁の喪失と、障子、襖をもつ和室の消滅である。

さて、近代以後に大きな変容をみせたのは、都市部の住まいである。多くの職業が混在する都市の住まいには、商家や長屋、仕舞屋型などがみられる。また、洋風の様式も導入されて、和洋折衷の住まいも登場した。とくに、高度経済成長期以後の変容が著しい。多様な価値観が多様な住まいを生み出したのだともいえる。

しかし、構造に注目すると、変容したものと不変のものとはつきりみえてくる。

都市部の住まいでは、縁とともに客間の座敷が消滅した。床の間などの接客装置を備えた、伝統的な和室である。冠婚葬祭専用の施設の登場によつて、家族の単位を超えて行われる通過儀礼の場が移行し、多人数の人を迎える必要がなくなったからである。その代わりに、洋風の応接間が普及することになる。応接間は、簡略な対応をするための客間で、この部屋が玄関付近に配される点に注目したい。家族と共用の便所も、玄関付近に配される。これは、家族が日常生活をおくる居間や寝室など、オクの空間に他人を入れない構造であり、ここには「クチャーオク」の秩序が依然として継承されているといえよう。古い商家には、表通りに面した「ミセノマ（店の間）」から奥に向かつて、居間、客間を兼ねた寝室

が配され、それらをつなぐ土間の通り庭がみられる。さらに、坪庭をはさんで奥座敷をもつ町屋もある。これも、「オモテーウラ」という従来指摘されてきた秩序に加えて、「クチーオク」の秩序として解釈することができよう。

地方の住まいについては、冠婚葬祭とくに葬儀が地域社会のなかで営まれる伝統が残存しており、儀礼の場として座敷が残されている。それに付属する縁も、みるこことができる。一方で、応接間もつくられ、簡略な応対はここで行われる。子ども部屋については、都市部と同様である。外観上の変容は少ないが、内部の構造は同様の変容を示しつつあるといえる。なお、南西諸島の住まいでは、茅葺の屋根や縁柱、ヒンブンなどの伝統的な外観が失われ、屋外に設けられた風呂や便所などの付属施設が母屋にとりこまれるようになった。屋内の構造では、ウラ側に配されてきた寝室が家族の個室として使用されるようになって増加したが、火の神や仏壇、床の神の祭祀設備は依然として旧来の場に設けられている。

大正から昭和初期にかけて日本各地で開発された「田園都市」は、理想的な街と住まいを求めたひとつの実験であった。しかし、洋風の街に洋風の住まいを建てるは

ずが、なぜか洋風の街に多くの和風の住まいが建つことになった。その後の経過は街によって異なるが、たとえば大阪近郊の千里山住宅地では神社と寺院が建てられ、盆踊りなど伝統的な行事も導入されて、和風の暮らしが展開されることになる。比較的洋風の要素が強調された東京の田園調布でも、和風の暮らしが放棄されることはなかったようである。そのうちのひとつである大川家は、建築当初はほぼ洋風の様式であったが、一年後に寝室が和風に改築されたという。

住まいは変容しつつも、伝承されてきた住感覚と、間取りを決定する秩序・空間認識は、根強く残ってきたといえるのではなからうか。

〈註〉

- (1) 水島福太郎「祈りの舞」二二頁、東方出版、一九九一
- (2) 「史料拾遺 第一巻、宇佐託宣集」一〇七頁、臨川書店、一九六六
- (3) 森隆男「住まいの構造を説む——開閉する住居空間」『民俗建築』第一一三号、一九九八
- (4) 中岡義介「神人共棲」『空間の原型』一九四―一九七頁、筑摩書房、一九八三
- (5) 森隆男「諏訪社の祭祀と仮屋」『近畿民俗』第一五四号、一九九九
- (6) 森隆男「庭籠の習俗からみた火」『関西大学博物館紀要』創刊号、一九九五（のちに、森隆男「住居空間の祭祀と儀礼」岩田書院、一九九六に収録）

(7) 佐藤俊「レンディーレのテント」『季刊トリトルワールド』六三号、一九九七

一九九七

(8) 高取正男「後戸の護法神」『大谷大学国史学会五〇周年記念論文集』日本人の生活と信仰、一九七九（のちに、高取正男『民間信仰史の研究』法蔵館、一九八二に収録）

(9) 宮本常一「日本人の住まい」一〇八頁、農文協、二〇〇七

(10) 前掲(8)

(11) 服部幸雄「後戸の神——芸能神信仰に関する一考察」『文学』第四卷第七号、岩波書店、一九七三

同「宿神論——芸能神信仰の根源に在るもの」中『文学』第四三卷

第一号、岩波書店、一九七五

その後、服部は一連の研究を研究史にまとめ、『宿神論』（岩波書店、二〇〇九）として刊行した。

(12) 前掲(8)

(13) 徳島県では、埋葬後に墓地から帰った人が死者の霊に扮し、住まいに残っていた人と一夜の宿をめぐって問答する、興味深い儀礼が報告されている（近藤直也『祓いの構造』二二〇～二二二頁、創元社、一九八二）。

(14) 津山正幹は、雨垂れ落ちにエナや産湯を捨てたり、死者の枕飯を雨垂れ落ちで笑く事例から、この場所が生と死の対応する結果であると指摘する（津山正幹『民家と日本人——家の神・風呂・便所・カマドの文化』九七頁、慶友社、二〇〇八）。

(15) 小松茂美編『続日本の絵巻 春日権現験記絵 上』五〇～五一頁、中央公論社、一九九一

(16) 『近畿民俗』第八四・八五号、和歌山県伊都郡かつらぎ町天野共同調査報告集(Ⅱ)、一九八〇

(17) 小野重朗「神々の原郷」二二頁、法政大学出版局、一九七七

(18) 上田篤は、動物の巣の発生はカクレガにあるとし、そこに住まいの始原的形態を求めた（上田篤「カクレガからミアラカへ」上田篤他編『空間の原型——すまいにおける聖の比較文化』筑摩書房、一九

本書の概要

第一章では、「御飯屋」と呼ばれる臨時の祭祀施設をとりあげる。これは、一般的な「住まい」を単純化した「神の住まい」といえるもので、古い時代の住まいの基本的な構造が反映していると考えられるからである。たとえば、閉鎖的な構造と枕の納入にみられる「寝室」としての機能は、古代から中世にかけてつくられた塗籠に通じる。その典型は、松葉茸の屋根と土壁をもつ春日若宮祭の御飯屋であろう。また、御飯屋が常設化したと思われる神社本殿の事例中には接客空間が分化したものもあり、住まいの古い形態を考えるうえで参考になる。

諏訪大社の祭儀では、かつて「御室」と呼ばれる土座形式の御飯屋がつけられ、神職の大祝が蛇体のつくりものとともに籠つて神の靈力を身につける儀礼が行われた。御飯屋には神の誕生・靈力の再生の場としての機能もみることができ、その一部は寝室に関わる習俗に継承されている。

奈良盆地などには、多様な形態の御飯屋が残存する。すでに儀礼が消失し、御飯屋だけがつけられる事例もあるが、いずれも人と神の関係を伝える有形資料である。

第二章では、住居空間における各部屋や、縁などの役割を決定する「秩序」を抽出する。住まいには「カミィシモ」「オモテウラ」の二つの秩序が存在すると考えられてきた。とくに「オク」の意識は町屋に顕著で、床の間や書院を備えた高い序列の部屋になっている。本書では、そこに「クチ」の概念を加えて、「クチーオク」の秩序が古くから存在し、この秩序こそが住まいの基本的な機能から発生したことを提示したい。

まず、婚礼から隠居まで、人生の節々で寝室が移動する事例を紹介する。そこには、住まいの精神的な中心が寝室であるという観念がうかがわれる。寝室が精神的に最奥部に位置する点から、「クチ」の出入り口「対してオクの寝室」という重要な秩序を創出していることがわかる。また、その場所が家・家族を守る「家の神」の祭祀の場であったことを、長野県や静岡県的事例から検証する。西日本の各地で報告されている納戸神の信仰も、このような秩序のなかで理解することが可能であろう。同じ系譜に連なると考えられる座敷童子や守宮神も同様

である。

一方、「カミーンシモ」と「オモテーウラ」の秩序は、あいまいな空間も内包している。しかし、神棚や仏壇、臨時の祭祀設備の設置場所からみると、これらの秩序について明確な意識のもとに配置されていることがわかる。仏壇の設置場所に注目して、家の神としての役割をもつ祖先神についても考察する。

第三章では、他界や聖地から神が来訪する際、それを認識する常設や臨時の設備をとりあげる。村のレベルでは、藪の形態をとることも多い。住まいのレベルでは、臨時の設備をつくる事例が多く報告されている。まずこれらについて、伝承されている情報を重ねながら検証する。

盆に来訪する祖先の霊も、住まいを訪れる神の典型であろう。盆棚を庭・縁・座敷の連続する空間のなかで把握すると、これらの空間に明確な秩序が設定されていることがわかる。接客機能の発達という視点でみると、時間軸上の変容を理解することも可能である。

南西諸島では、座敷に設けられた床の間を最上の祭祀の場とする事例をみることができる。八丈島では、常設の祖先祭祀の場が屋外から屋内に移行する様子を具体的にみる事ができる。庭に建てられていた持仏堂が屋内に移動すると仏壇の形態になり、設置場所も縁から部屋の中央部に移動する。

屋外から屋内に連続する空間のなかで、縁 という両義的な空間を使用して、見えない神をコントロールする合理的な思考がある。一方、屋内と屋外を明確に遮断する 結果 も設定され、両者を使い分けて来訪する神々に柔軟な対応をしてきた構造をみる事ができる。そこには、住まいが物理的に、さらに精神的に、シエルトアの機能をもっていることが示されているといえる。

第四章では、住まいの変容に焦点をあてる。まず、都市部の住まいである長屋型と仕舞屋型しまたやの住まいをとりあげ、家族の生活を優先する構造を確認する。これらの住まいは、多人数の客を迎えて行く 儀礼の場 をもたない。また、神仏の祭祀も個人レベルの信仰として行われており、流動的である。

一方、町屋では「クチーオク」の秩序が明確であり、プライベートや騒音から家族の生活を守る知恵が伝承されている。このような構造が、観光化のすすむ地域で応用できることを提案する。住まいが創出する景観のあり方についても言及したい。

さらに、社会状況にあわせて変容が著しい南西諸島の住まいを事例に、変容する部分と不変の部分を抽出して、その理由を検証する。オモテ側の空間に大きな変化は認められないが、ウラ側の空間のうち寝室のスペースが増大し、個室化されて個人別に一部屋ずつ確保されている。そこには、火の神に代表される伝統的な神観念と儀礼がいまなお残存する一方、個人レベルの生活を重視する価値観が浮上する。南西諸島の住まいの特色のひとつである「ヒンブン」が、材料など形態上は変容しつつも伝統儀礼のなかでいまなお重要な機能を果たしていることも紹介する。とくに、沖繩本島と比較して濃厚な分布を示す八重山地方の小浜島では、年中行事や通過儀礼の際に、神や人の動線を決定する装置として顕在化する。住まいは、社会状況や家族の構成などに応じて変容する、ハード・ソフトの両面で柔軟な構造をもつことがわかる。

第五章では、関西初の本格的な田園都市として大正時代に開発された大阪府の千里山住宅地（せんりやま）を取りあげる。「職住都市」というハウードの提唱した田園都市像とは異なる日本の展開を理解したうえで、ほぼ同時代に開発が始まった東京都の田園調布と比較しつつ、発展・変容の歴史を検証する。そこには、社会状況や住人の価値観などから、田園調布とは異なった歴史があった。近代的な洋風の様式をとり入れながらも、一方で街に寺社や伝統的な行事をもちこみ、住まいにも神棚や仏壇を設置するという生活様式を捨てきれない、関西の都市の住まいの本音がみえてくる。

また、大正から昭和初期において理想的な街と住まいが追求された田園都市に、環境や地域社会のあり方など、今後の街と住まいのあるべき姿を考える重要なヒントが存在することを指摘したい。昭和五年（一九一〇）当時の大平内閣の政策研究会が、人と自然が調和した地域づくりのモデルを田園都市に求めたのも、同様の理由からであった。

田園都市は、まさに都市部における街と住まいの理想と現実を示す「文化遺産」といえよう。

専門書として刊行したが、今後若い世代に住まいに関心をもってほしいとの思いから、ルビを多用した。読者のなかには少しわずらわしさを感じる人もあると思うが、筆者の意を汲んでご容赦いただきたい。